
真剣で悪魔と恋しなさい！

兵隊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で悪魔と恋しなさい！

【Nコード】

N5175M

【作者名】

兵隊

【あらすじ】

呪われし三島家の血。その血が少年の中に流れている。

三島の血は少年をどう導き、少年はどうしていくのか

。

プロローグ（前書き）

息抜きに書いてみました。

鉄拳シリーズ大好きです。特にデビル因子とか中二心がくすぐられる響き。

ブローグ

その夜、親不孝通りの路地裏で悲鳴が聞えた。

真っ暗な路地裏。

そこに10人の人影があつた。

そのうち5人は倒れ、4人が1人を囲むようにして立ち塞がる。

4人が4人ともそれぞれ武器を手にしている。手には、バタフライナイフや警棒、鉄パイプや催眠スプレーなどといった物で、統一性がまったくない。

だが、それぞれ手にしているその凶器たちは、素人なら必殺出来るであろう威力を誇っている。

そう、“素人”なら、だ。

4人が4人共、血走った目で囲んでいる1人の少年に目を向けていた。

だが、少年は動じない。

ただ左手を若干開き気味で前にし、右手を軽く握り引いて構えている。

少年の目つきは鋭く、髪型も後ろにトンガっているかのような髪型だ。

これで聞く限り、これでは普通の目つきの悪い少年に感じるだろう。だが、少年の異常さはそれだけではない。それは背と歳だ。

少年の歳は、見た限り4〜6歳の間だろう。身長もその歳相応の
でかさだ。

この歳で、しかもこんな夜更けに治安の悪い親不孝通りにくる事
態異常なのだ。普通の家庭に育ち、普通の親がいるのなら考えら
れない行動。これで、少年は普通の環境で育っていない事が分かる。

痺れを切らしたのか。

少年の真っ正面から、おオあ！ という雄たけびを上げながら、
囲んでいた不良の1人が少年に襲いかかる。だが、少年は動じない。
眉さえ動かさない。ここでも少年は異常だった。

少年に不良が手にしている鉄パイプが襲いかかる。

普通の者ならば、そのまま額にあたり血を噴き出し、大けがにつ
ながるだろう。

何度も言うが、少年は普通ではない。

少年は左手で、不良の右手をいなす様にして右にずらす。そうし
て、鉄パイプは少年に当たらず、虚空を振り抜いた。

その隙を少年が見逃すわけがない。

直ぐにいなした左手を、握りしめ左ひじを曲げて、襲いかかつて
きた不良の顔面に左ひじをめり込ませる。

不良はその一撃に崩れ落ちるが、少年の追撃はそれで止まない。

少年はそのまま不良の顎を足の裏側で蹴り上げ、そして踵を顔面
に振り下ろす。

その不良の顔の鼻から止めどなく、鼻血が噴き出る。鼻はつぶれ、
顔面も複雑骨折しているかもしれない。

残りの三人の不良たちはそれを見て、恐怖一色に染まる。

今少年に倒された不良こそ、彼らの中で一番強かったからだ。獣の群れは一番強い統率者を失うと、統率力が無くなり、右往左往してしまう。

その獣たちが、今の不良たちだった。

現に少年から少しずつ後退している。

そして

「う、うあああああああ！！」

「ま、待てよっ！」

「ば、化け物だあああああっ！！」

少年に背を向けて走り出した。

少年はそれを見て、口を左右に切り裂いたかのような笑みで見る。今逃げているアレは狩られる側だ。という事は今の自分は狩る側の人間。そんな人間がヤツらを逃がすと本気で思っているのだろうか。

少年はそう思うと、ゆっくりとした足取りでそれを追う。

逃がすつもりはない。もうアイツ等は自分の獲物だからだ。

そうして、親不孝通りは静寂に包まれる。人が何人倒れようが、世界は動き続けるのみである。

3人の不良たちが倒れている。

先程の少年はもう動かない不良たちを見おろす。

そしてしゃがみこみ、倒れている不良の中の1人の髪の毛を掴み、自分の顔の目の前まで持って行く。

「オマエ等さア、」

口元を薄く、ひたすらに薄くして笑いながら、

「誰エ敵に分かってンのかなア？」

狂喜。

少年の今の顔は正に狂気と言ってもいいだろう。見るモノを心の底から震えあがらせるような笑みを少年は放っていた。

だが、そんな笑みの前でも不良は何の反応を見せない。

少年はそれが面白く無いのか、チッ！ と舌打ちをすると、持っていた不良の顔を地面に思いっきり叩きつける。叩きつけた瞬間、不良の体がビクツと痙攣したかのように大きく反応するが、少年は何の反応を見せない。もう、息もしないモノには、興味がないからだ。

少年は思う、つまらない、と。

その瞬間。

「いやあ、大した子供だねえ。俺のガキの頃を思い出させるぜえ」

ぱちぱち、と手を叩く音が聞える。

少年がその方向に視線を向けると、男が少年に拍手を送っていた。禍々しい気を纏っている男。暴力を体現したかのような男が楽しそうに笑いながら、

「その流派、見た事あるぜ。確か『三島流喧嘩空手』だったよな？
前に戦った事がある」

「それがどうしたってんだよ、オッサン」

「坊主、名前は」

「名乗ると思っただのかよ？」

「ああー、そうだなあ。んじゃ、俺が勝ったら名を名乗れ」

「え？ ナニ？ オッサン俺と殺り合うき？ 言っとくけど俺強いよ？」

「おつ、いいねえ。その感じますます俺のガキの頃そつくりだ。まあいいから構えろよ。お前が井の中の蛙ってヤツを教えてやつからよ」

そう言っつて、男は不敵に笑いながら、

「おつと、自己紹介が遅れたな。俺の名は釈迦堂形部。よろしくな坊主」

少年は、聞いてねエよ、と言いながら構える。
。 三島仁八が戦い始める
みしまじんや

プロローグ（後書き）

どうもみなさん、おはこんばんちは。 兵隊です！

息抜きに書いてみました。 続くかは未定。 凄く未定であります。
鉄拳シリーズ大好きですね。 三島家の壮大な親子喧嘩は見物であります。

KOFとかもいいですねー。 手から炎とかカッコよすぎる。 そんなクロス無いのかな？

ご意見ご感想ありましたらよろしくおねがいします！！

第1話（前書き）

三島一族マジパネエっす

第1話

釈迦堂形部が少年に出会ったのは必然だった

。

本来彼がこの時間帯にうろつくのは滅多にない。いや、もっと詳しく言えば、川神院の師範代になってから滅多にない。彼の子供の頃は、師範代という枷が無かったので“それなりに”夜暴れまわり。“それなりに”人を殴ってきた。ま、彼の“それなりに”の基準が、一般人の基準だったのかは疑問に思うが。少なくとも、川神院の師範代になってからは暴れまわっていない。

だが、今日だけは夜の川神へ足を運ぶ。

単純に言ってしまうえば眠れなかったからだ。悩みがあるとか考え事をしていたとかそんなメランコリックなモノじゃない。ただ、『眠れなかった』。

体が疼いて仕方が無かった。誰かが自分を呼ぶような感覚。その感覚に引かれて、釈迦堂形部は夜の川神へ、川神でもっともアンダーグラウンドな場所である親不孝通りへ足を運ぶ。

親不孝通りにはいつも通りの風景が広がっていた。

路地裏は暗く、何をしているのかも分からない。視線を外せば、風俗の客引きがいる。上を向けば、風俗や何かあやしい事務所の看板のネオンが光り輝いている。倒れ伏している者までいる。そう言ったヤツらは大概目がイつていたり、口角から泡を吹き出している。要するに、薬を決めている者たちだ。

人間の黒い欲望が形を現したかのような光景だった。

常人の人間が見れば、啞然とし徐々に嫌悪するように見ているだろう。だが、釈迦堂の顔に嫌悪感はない。むしろ、愉快愉快と言わんばかりな笑みを浮かべる。

これこそ、人間のあるべき姿と認識しているからだ。

むしろ、人間はこうあるべき。上っ面の純白を気取るよりも、こうして自身の欲望に忠実であった方が人間らしい、と釈迦堂は思う。

「変わらねえなー。ここは」

釈迦堂は愉快気に笑う。

変わらない事は良い事だ。ここは変わらないでくれ。
謳う様にそう思う。

「……っ」

顔を片手で覆う。

ここの空気にあてられたのか、釈迦堂の体のうずきは増すばかり。
このうずきこそ、長年付き合ってきた戦いへの欲求だ。これは治る
事は無い。いや、むしろ治す気はない。これは自分の性の^{サガ}のような
ものだ。人の性癖が治らないと同じ様に、彼の性はもう治らないだ
ろう。

人の血を見たい。人を殴りたい。人の殴った感触を確かめたい。

釈迦堂は狂う気持ちだった。

ああ、本当にこのまま我慢したら、

クルッテシマウ。

その時だ。

釈迦堂はバツと勢いよく路地裏に視線を向ける。

路地裏から、血の匂いがする。

嗅ぎ違う訳が無い。間違える訳が無い。これは正真正銘、血の匂
いだ。

釈迦堂は笑う。狂ったかのように口元を曲げる。

この瞬間だけ、彼は神を信じた。こんなに苦しんでいた自分に、獲物の存在が、ご褒美をくれたのだ。

そんなご都合主義の塊のような存在。普段は信じないが、今だけは信じてもいい。

「ああー、川神院師範代として。コイツあきつく躰けなきゃ駄目だよなあー」

考えれなかったご褒美に、口元からよだれが流れる。それを手の甲で拭くと、彼は血の匂いがした路地裏へ向かう。

目は狂気に染まり、正に獣のような目だった。

。

「おいおい、そりゃないぞ」

血の匂いを辿ってみれば、もう誰かに食い荒らされた跡だった。釈迦堂は血まみれに倒れている者たちを見る。倒れているのは6人。それぞれが、重症と言ってもいい代物だった。両足をねじ折られている者もいれば、片目が無い者までいる。正に全員が全員致命傷。

路地裏にむせかえるほどの血の匂い。辛うじて聞える呼吸音。自体はもう既に済んでいた。何という鮮やかな惨殺空間。

釈迦堂はお預けをくらった狗のような心境だった。こんな惨状では何も満足できない。何も満たされない。体のうずきは、止まらない。

「どうすっかなあー。適当にそこら辺にいるヤツをぶちのめしてあん？」

何かを見つけた。

それは真っ赤で点々と続いている。

釈迦堂はそれに近づき、もっとよく見てみようとしやがみこむ。それは血だった。だが、普通の血ではない。血で作られた足跡だった。普通の血の足跡だったら、ここまで釈迦堂の気を止めないだろう。

問題は血で作られた足跡の大きさだ。明らかに子供の大きさの足跡は釈迦堂のやってきた方向とは逆方向に続いている。

こんな路地裏に、しかも子供の足跡なんてあり得ない。しかも時間帯が時間帯だ。こんな時間帯で出歩く子供何て普通じゃない。無理矢理連れて来られたなら納得出来るが、それも違と言える。もし無理矢理だったら、こんなしつかりとした足跡なんて残らない。

「はははは、」

[illegible]

「
い
い
ね
え
……」

だが、この惨劇を創り出した子供に興味がある。

もう釈迦堂に戦闘の意欲は失せていた。そんな事より、その子供に会ってみたい。何をする話でも無く、その子供に会って見たい。

そうと決まれば、善は急げ。
この足跡を追うとしよう。

だが、

「ま、待ってくれ」

足元から聞える声に釈迦堂の足が止まる。
釈迦堂は聞えてきた足元に視線を向ける。

「あー、何の用だ？」

「だずげて、くれ……………！」

足元でそんな声が聞えてきた。

釈迦堂はめんどくさそうにその者の体を注意深く見詰める。

率直に言つと、その者は助からない。何より、血を出し過ぎだ。

顔は青ざめ、唇は紫色に変色している。今から川神へ行っても助からないだろう。

血もそうだが、何より。彼は、片腕が無くなっている。
。

助からないと分かっているが、自分は紛いなりにも川神院師範代。

清く正しい教え通り、助けを求められてたら助けねばならない。

「あー、はいはい。わかりましたよつと」

釈迦堂は心底めんどくさそうに、片足を上げる。

助けを求めていた者は、希望にあふれている半面、不思議そうに釈迦堂を見つめていた。

そして、

「楽にしてやるよ」

そうして、釈迦堂は片足を振り下ろす。

自分の救いが、彼の救いになるか分らないが、自分なりに彼を苦しみから救い出した。

「おーいたいた」

釈迦堂は直ぐに例の子供を見つけ出す事が出来た。もう少しかか
ると思ったが、そんなに時間はかからなかった。

子供は少年たち3人と戦っていた。いや、それはもう戦いではな
い。アレは“狩り”だ。子供が狩る側で少年たちは狩られる側。こ
の構図は変わる事が無いだろう。それほどまでに、少年たちと子供
との戦力差は開いていた。

それを分かっただけで、尚、釈迦堂は手を出さずに見守るようにして
見る。

人の獲物を取るなんて、ルール違反。自分もそこまでは常識をわ
きまえているつもりだ。

それに見守っている理由はそれだけではない。

「おいおい、あのガキ。まさか……」

子供が少年を1人屠った辺りから、釈迦堂は驚きの声を上げる。

子供が使っている流派に見覚えがある。

アレは、『三島流喧嘩空手』だ。“三島”の者にしか伝授されな
い実践中の実践の拳法。川神流のような良い子の拳法とは違うが、
同じ門外不出の流派。

そんな流派を扱っているあの子供は、三島の者という事になる。

「アイツの子供^{ガキ}か？ あー、見てみればアイツに少し面影あるなあ」

子供が少年を2人目を屠った辺りから、釈迦堂は頷きながら呟く。
あの目つきの悪い所と良い、トンガっている髪型と良い、構えと
良いそっくりだと思った。

そして、何より。子供からにじみ出ている禍々しい気。それこそ
“アイツ” そっくりだと釈迦堂は思った。

「おっ、3人目も倒しやがったか。速い速い」

そう軽い口調で釈迦堂は言つと、子供に拍手をしながら近づく。
そして、確信していった。

今日、この夜に自分を呼んだモノは、この子供なのだと。

そうして、彼らは殺し合う。ただ、本能のままに
。

釈迦堂と謎の子供の戦い。

終ってみれば、釈迦堂の圧勝だった。

化け物のような強さ。自分よりも禍々しいとも言える気。この2点を持っていようが所詮は子供。釈迦堂形部に勝てる道理は無かった。

とはいっても、危ない場面もあった。

釈迦堂は自分の腹部を見る。

そこには衣服が破れ、子供の拳ぐらいの大きさの赤い痣があった。この歳で、自分に一撃を与える子供なんて百代のみと思っていたが。流石、“アイツ”の子供^{ガキ}という事はある、と内心そう思う。

「おい、坊主。テメエの名前教えやがれ」

仰向けに倒れている子供に向かって、釈迦堂はそう言う。
だが、子供からは何も返事が無い。

「おいおい、気絶でもしてんのかよ」

釈迦堂はめんどくさそうに、頭をポリポリ掻きながら近づく。

1歩、2歩、3歩、4歩、5歩。

6歩歩みよるが、

「っ！！？？」

全身の力で、後方に跳ぶ。

釈迦堂をそうさせたのが人間の本能だったのか、それとも獣としての勘だったのかわからないが、子供にそれ以上近づく事を拒んだ。これ以上子供に近づいていたら殺された、と。あと一歩でも近づいていたら自分は死んでいたと本能がそう告げてる。

（なんだ、なんだこれは！？）

今まで感じた事のない悪感が釈迦堂の体を駆け巡る。

体中から冷や汗が流れ、両手両足が震える。純粹な恐怖からだとも認識するまでに時間はかからなかった。

（俺が恐怖だ！？　こんな子供^{ガキ}にかっ！！？）

子供に視線を向ける。

仰向けに倒れているが、前よりも禍々しく、前よりも悪感がある。

背中が弾け飛び、そこから黒い翼が飛び出した。

それは、翼というよりも、噴出に近かった。

墨よりも黒く、光をも飲み込む、正体不明の翼。

正に、今の三島仁八は恐怖の塊。暴力の嵐とも言えるだろう。数百人みたら数百人共恐怖するだろう、その姿。

それを見て、

「はははっ、」

釈迦堂形部は、

[illegible]

笑っていた。

気が狂ったのではない。

ただ純粹に、楽しく、笑っている。

「おもしれえ！ お前おもしれえぞ！」

その言葉に反応したのか、黒い翼は数メートルにまで広がる。そして、体の重心を下げる。

子供は釈迦堂に突撃する構えだった。

「いいぜ、来いよ！ 思う存分、楽しもうじゃねえか！」

釈迦堂も構える。だが、普段の構え方とは違う。これこそ釈迦堂形部の夢幻の構え。釈迦堂が必殺を決めた時の構えだ。

そうして、2つの暴力。2つの恐怖が激突する。

第1話（後書き）

取り合えず、真剣で悪魔と恋しなさい！は一先ず休憩です。

真剣で王に恋しなさい！が一段落したら更新していこうと思います。

今の仁八ですが、鉄拳シリーズをやった事のある人はわかっている
と思われます。そうデビル化ですね。

本当に怖いですよ。デビル。

あつ、ちなみに仁八ですが、最強設定です。

では、ご意見、ご感想ありましたらよろしく願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5175m/>

真剣で悪魔と恋しなさい！

2010年10月11日00時19分発行